

長江の船旅

岡本祥一
予科5-7
航空通信16-4
(川口市)



葦の髄から

重慶から上海まで2,300km、本年（2018年）3月21日から十日間におよぶ長江の船旅に参加した。途中名所、旧跡を訪ね、また沿岸の風景を鑑賞しながらの、充実した船旅であった。



第1図 重慶—武漢の長江流域

葦の髄から覗いた印象では、中国社会の変わり様を目を見張ったというところであろうか。例えば、ひと昔前の農村、今にも倒れそうな家屋が脳裏に刻まれていた。今は全く異なり、全て2階ないし3階建ての新築白壁家屋が広い田畑の中に広がっていた。そして一面の菜の花畑、豊かな農村の風景が続いていた。

船上から眺めた多くの都市では、数十階の高層建築が軒を連ねていた。ひと昔前までは、上海のような大都市を除き、高層建築は見あたらず、低層の住宅、あるいは人工林、あるいは工場などが続く印象であった。住まいの改善は質の高い生活に結びつく。



第2図 地方都市の高層建築群

穏やかに進む船のデッキから見た限りでは、重慶から揚州までの約2千kmに及び長江沿岸には何らかの人手が入り、断崖絶壁の渓谷を除き、人跡未踏と思われる地帯は全く見られなかった。

対照的に、半年前に参加したロシアの河川、サンクトペテルブルグからモスクワまでの約千キロの船旅では、ほとんどの沿岸は人跡未踏と思われるような広大な森林地帯であった。

さらに、長江では行き交う船が多かったことも気になったことである。資材を満載した貨物船がひっきりなしに行き来している。途中、数十隻の貨物船の集団が密集して遡行する光景も見られ、この点もロシアの河川では殆ど見られない光景であった。

このような中国とロシアとの対照的な河川の実態はたいそう興味深いものであった。中国の活力の一部を垣間見た思いである。

鑑真ゆかりの揚州、バスでの観光である。40人のりのバス、エンジン音が無い。電動式であるとのこと。気がついてみると街を走る全てのバイクも電動式で無音である。揚州市内の全てのバスは電動となっているとのことであった。我が国では街全体の車を電動式にする発想はまだ聞いたことが無い。街の騒音の多く

はバスや大型車のディーゼルエンジン、そしてバイクによる。とりわけ暴走族は真夜中に故意にエンジンをふかし、住民に大迷惑をかけている。日本でも車の電動化そして無音化を是非進めてもらいたい。中国は車の電動化で我が国の先を進んでいる。

もう一つ、新聞報道もされているが、中国ではすでにキャッシュレス社会となっている。商品にタグが付けてあり、そこにスマホをかざせば精算完了である。実に便利である。この面でも我が国は遅れをとっているのではないか。一介の科学技術者として大いに気になることである。

15年ほどの昔、重慶から上海まで同じ、長江の船旅を楽しんだ。今回も同じ航路、二度目である。その頃の印象と比べ、近代化というか、中国の社会整備がかなり進んでいることを実感した船旅であった。

重慶

羽田から上海乗り継ぎ、重慶まで約6時間の飛行。真夜中の23時頃チェックイン。体が重い。

重慶は人口約3千万人、北海道とほぼ同じ面積、中国西南部最大の商工業中心地である。北京、上海、天津とともに中国の四大指定都市でもある。

翌日、羽田、関西空港からの参加者を加え約100名を6グループに分け、添乗員1名が16人を担当、6台のバスを連ねて市内を見て回る。

自家用車はVWをはじめドイツ製が圧倒的に多い。ニッサン、トヨタはごく稀にしか見られ無かった。その中で黄色の車体の小型タクシーは、目にした限りでは全てスズキ製であった。自家用車が増加し、渋滞が起きているとのことであった。

繁華街を見て歩きでの最初の直感、行

き交う人々の身なりがとてもよくなっている。以前の印象とは全く異なり生活レベルの向上が見てとれる。社会的に中間層の厚みが増しているのであろう。このツアーに参加した人達も同じ意見であった。

夕方、クルーズ船に乗り込む。約8千トン、定員は300名、乗務員は約100名の瀟洒な船である。シンガポール、香港、イギリスからの観光客、約100名の日本人そして若干の中国人を加えてほぼ満室の船出であった。

閻魔大王

最初の寄港地、豊都。約300段の坂道の上は道教に関する像や建物が見られ、さらに進み鬼門関をくぐるとそこは地獄。最奥の建物に大きな閻魔大王の像が祀られており、その後ろに大王の妻といわれる像も見られた。閻魔様に妻がいるとはこの年になるまで全く知らなかった。

戦前、確か新宿2丁目あたりに閻魔堂があった。青山墓地からの帰途、母親は必ず幼なかつた私を閻魔堂の前に立たせた。「嘘をつくとも閻魔様に舌を抜かれるよ」。目を大きく開いた大きな閻魔様は怖かった。幼ない頃の母親の一言、今でも決して嘘はつかないと決めている。舌はまだ抜かれていない。閻魔様と母親、遠い昔の切ない思い出である。

白帝城

長江クルーズのハイライト「白帝城」は小高い山の頂上にあり、昔は約1,000段を上らねばならなかった。現在は三峡ダムの影響で水位が上がり、約400段でお城に着く。迷ったが、日本円で6千円出せば駕籠かきが上まで運んでくれるとのこと。体調を考え、乗ることにした。江戸時代の大井川の渡しもこんなものであったらだろうか。何せお粗末な駕籠で必

死につかまっていなないと振り落とされる。やはり歩くべきであった。後悔先に立たず。実感である。



第3図 駕籠での山登り

三国時代、蜀を建国した劉備が夷陵の戦いで呉に敗れ、逃れてきたのが白帝城である。劉備は後事を諸葛亮に託し、この城で亡くなったといわれている。その際の状況を語るモデルが展示されており、また劉備の像をはじめ三国志で活躍した英雄たちの像も何体か祀られていた。このお城一帯は800年昔の歴史を偲ぶにふさわしいところである。



第4図 劉備の遺言と諸葛亮

船は三峡に入る。三峡はここから始まる三つの峡谷の総称。湖北省宜昌市の南津関まで193kmの間、上流から 瞿塘峡（くとうきょう、8km）、巫峡（ふきょう、45km）、西陵峡（せいりょうきょう、66km）が連続する景勝地である。



第5図 瞿塘峡

三峡ダム

三峡から三峡ダムを夜にかけて通過。ダム下流の宜昌に停泊する。バスで三峡ダム観光に出かける。ダム左岸の丘に公園が整備されており、その一画の資料館にダムのモデルが展示されていた。ダム観光といってもそれだけで、霧が濃く世界一と称する大型ダムは見え、見晴らしもきかず、早々に引きあげることとした。

その昔、長江の中・下流はしばしば大きな洪水に襲われており、その被害は甚大であった。三峡に洪水制御と発電を中心とする多目的ダムを建設しようとする構想は古くから提起されていた。最初の提唱者は孫文（1866～1925）、約百年昔の1919（T8年）であった。以来紆余曲折を経て、江沢民時代の初期、1992（H4年）4月開催の全国人民代表会議において、「三峡プロジェクト建設決議」が採択された。これを受けて中国政府は1994（H6年）12月14日に着工式を挙行した。完成は2009（H21年）で、16年に及び期間常時約3万人が働いていた。

発電総容量は1,820万キロワットで世界最大の発電所、ダムの堰堤の高さは185m、長さ2km、通常水位175m、貯水量は日本の黒四ダムの約70倍である。ダムにより作られた湖水の長

さは東京―神戸間より長い600km、水位上昇は白帝城を陸地から切り離し、さらに重慶にまで及んでいる。その影響で、大型船が上流まで運航可能となり、経済発展に大きく貢献しているそうである。水没し移転を余儀なくされたのは113万人（政府資料）、実際は約140万人ともいわれている。

ダムによる水面の高低差100m、船舶の通行は5段階の閘門により調節される。1カ所の閘門で20m、この操作を5回繰り返すことになる。この閘門式通路の料金は無料だそうで、さすが中国と質問者一同大いに感心した。



第6図 2通路 5段階閘門式船舶通路

停泊した宜昌には取り立てて見るべきものは無く、午後1時頃出航。やがて停船。三峡ダム下流にあるもう一つの葛洲ダム閘門に入る時間待ちである。やがてゆっくりと動き出す。閘門にはすでに三隻が入っており、全長100m、8千トンの本船が隙間に割って入る。隣の船として壁との距離は手が届くほどに近い。舵取りが大変であろう。船長の腕の見せ所である。無事閘門を通過、次の予定地荊州に向かう。

荊州

三国時代、この地を根拠に活躍した関羽は今でも多くの人々から絶大な人気を得ている。その根拠であった城の観光である。高さ58m、重さ1320トンの世

界一大きな関羽の像が印象的であった。

この巨大な像から、モンゴル、ウランバートル郊外にあるチンギス칸の純ニッケル金属製巨大像を思い出した。広大な土地に起因するのであろうか。偉人の巨大な像は大陸に住む人たちの共通のあこがれなのであろうか。

武漢

武漢の地名は、支那事変に際しての武漢三鎮占領、それを祝う提灯行列と結びついている。広大な中国大陸、生死を分ける運命と戦いながら歩き続けた将兵、大変な労苦であったであろう。今となっては何とも空しいことのように思えるのであるが。前回の長江船下りでは、有名な黃鶴楼参観であったが、今回は東湖磨桜園であった。



第7図 満開の桜

千本近い桜が満開であり、また、花桃、海棠、なども鮮やかに咲いて誠に見事な花園であった。春爛漫の風景を心ゆくまで楽しむことができた。この桜園は弘前公園の桜、ワシントンの桜と並ぶ世界三大桜園の一つとなっている。

1979（S54年）、周恩来首相が78歳で永眠、冥福を祈って当時の田中角栄首相が78本の桜を寄贈したのが発端である。その後日中友好機運の高まりとともに桜の寄贈者が増え、今日見る桜の名所となった。

昼食の後、湖北省博物館へ。20万点あまり

の文物の中、「臥薪嘗胆」で知られている越王勾踐自作と言われる細身の剣が皆の目を引いていた。

景德鎮

船は九江に到着。ここから約2時間の高速道路経由、磁器の製造で世界的に有名な景德鎮に入る。精妙な成形、絵づけ職人の技に感心する。

景德鎮磁器の特徴は、近くの山、高嶺（Kaoling）から産する陶土（陶石）に起因する。焼成温度が1100度程度と高く、また鉄分が少ないため堅くて白い焼き物、磁器が得られる。日本の有田焼も、17世紀初頭、太閤秀吉の朝鮮侵攻の際連れてこられた李参平が有田町の泉山で陶石（カオリン）を見つけ、それ以来有田焼と称されている磁器が作られてきた。

有田焼とカオリン、筆者の頭の中では堅く結びついていたが、カオリンの名前が景德鎮の山、高嶺の名前であることはついぞ知らなかった。よい勉強になったと感謝している。

揚州

鑑真和上（688～763）の大明寺がよく知られている。今回は世界遺産瘦西湖のほとりを散策した。杭州の西湖をモデルに小さい西湖、瘦せた西湖として作られた人工湖である。建物が美しく、江蘇建築の屋根が印象的であった。

あとがき

揚州から上海までの航路は折からの濃霧で夜間の航行ができず停泊。翌日バスで出発となった。高速道路は完備されており、昼過ぎに上海に到着。昼食後空港へ直行する。上海観光はできず残念。

最近日中間で外務大臣同士の話し合いが持たれ、友好機運が高まりつつあるように思われる。一衣帯水の間柄、小異を捨てて大同につく動きが高まることを祈念して擱筆する。

（2018年4月中旬脱稿）